

5. 大歳剣友会

代表指導者 伊藤 章

大歳剣友会は、平成元年6月に地域の有志の方々のご支援により発足することができ、今年で7年目を迎えることになりました。現在では、地域内の指導者5名と小学生から中学生をはじめ、OBの高校生を含め42名で稽古に汗を流しています。

剣友会では、「剣道は剣の理法の習練による人間形成の道である」という剣道の理念をもとに、「地域に奉仕できる健全な少年の育成」を目標に、剣道を通じて身体を鍛えるだけでなく、心豊かな少年を育成することを目的としています。会の構成も、小学校1年生から高校生2年生といったように、他のスポーツ少年団では見られない幅広いもので、地域のジュニアリーダーを育成して、地域活動に十分に反映させようと思っています。

活動は大歳小学校体育館で、週2回（水曜日～午後6時から午後7時30分、日曜日～午後5時30分から午後7時）の稽古を行っているほか、その成果をみるために山口市内の大会をはじめ、県下の大きな大会及び県外の大会等年間10試合程度をメドに剣道大会に参加しています。試合成績は、発足当初「出れば負ける」というのが常でしたが、指導方針の「基本が第一、結果は二の次」が功を奏したのか、最近では県内でも最大規模の大会である錦兜争奪長門剣道大会の団体中学生の部で、昨年・今年と2年連続3位の好成績を上げるほか、市内外の大会でも上位に入賞するようになりました。

また、保護者を中心とした後援会活動も活発で、子供達の活動をはじめ、夏季キャンプ、クリスマス会、卒業お祝い会等の行事には、一致団結しての援助活動にあたるほか、夏祭りや大歳祭り等の地域行事にも積極的参加を続けており、保護者間の輪とコミュニケーションの良さには目を見張るものがあります。

武道では、従来から「礼に始まって、礼に終わる。」ということがよく言われていますが、これは他のスポーツにも言えることです。常に相手に対する「お願いします」「ありがとうございました」という気持ちが大切で、剣友会ではその姿勢、態度にも重点を置いています。夕方剣道着を着た子供達を見受けられることがあると思いますが、悪いところがあれば注意してやって下さい。地域の方々の一人一人が指導者と言った地域作りが大切な子供達の育成方法と思っています。

剣友会は、発足当初からスポーツ少年団に加盟しておりましたが、従来からの懸案でありました剣道連盟にも加盟し、剣道道場としても、自他ともに認められるようになりました。

剣道指導者の一人として「剣道は生涯スポーツの最たるもの」と自負しております。剣道は老若男女を問わずにできるスポーツで、指導者及び剣道をやりたいという子供達をお待ちしております。

最後に、地域の皆様のご声援によりまして、剣友会の活動を益々盛り上げていただきたいと願っております。



第5章 思い出



思い出の石津橋

この章は、卒業生や先生方に在校当時の思い出を綴ってもらいました。ページの都合で、ごく一部の方々の登場となりましたが、寄せられた幼き日の話題は、いずれも共通の思い出ではないでしょうか。あらためて郷愁のよすがになればと期待しています。

なお、卒業生・先生方を別枠としないで、すべての稿を関係された年次順に並べました。

1. よく働き よく学べ

大正7年3月卒（当年90歳） 秦 忠夫

大正元年（1912）大歳尋常高等小学校に入学、同7年に卒業しました。この年は、長く日本軍を苦しめることになるシベリア出兵が始まり、8月に米騒動が起きました。

この大正時代は、まだまだ文化も発達していなかったもので、木綿の着物にへこ帯、それに下駄やわら草履をはいて、風呂敷に本を包んで学校に行ったものです。

私は兄や妹が多く、9人兄弟でした。ですから、学校から帰るとすぐ家の手伝いをさせられました。とくに背中に妹を背負わされ、子守をしたものです。

当時、学校では毎月1日に生徒一同そろってすぐ近くの朝田神社に参拝していました。いつも宮成神官のお話を聞き、神のありがたさを感じたことが強く印象に残っています。

私は健康が取り柄で、小学校時代の6年間1日も休まなかったもので、卒業のとき賞をいただきました。賞品は半紙1束でした。90歳になった今も元気に毎日を過ごしています。健康の秘訣はと聞かれますが、今思えば、私達の子供のころは「よく働き よく学べ」が合言葉でしたので、そのお陰ではないでしょうか。

小学校時代を思い出し、有り難く思っています。

2. 大歳小の思い出

大正11年卒 下湯田 村上 藤子

大正5年、一人っ子の私が小学校へ入学するというので、家中張り切っていた。母は私の新調の着物と袴を風呂敷に包み、自分の着物は衣紋掛につるしていた。ところが、入学式当日の未明、可愛がってくれていた祖母が脳溢血で倒れ家中大騒ぎ。私はとりあえず近所の親御さんに頼んで学校へ連れて行ってもらった。式の間も私は祖母の安否が心配で気もそぞろ。式がすんで飛んで帰ってみると、祖母はやや持ち直していて胸をなでおろした。

そのころの大歳小学校は古い校舎で、講堂も雨天体操場もなかった。式となると、長い4つの教室の仕切りを取り除いて、3つの教室の机と腰掛を一番端の一教室に積み上げてできる式場であった。それが私どもが6年のとき、新しい講堂兼雨天体操場が竣工して、やっと卒業式に間にあった。まだ両側には足場が残っていたものの、完成したばかりの講堂で卒業式が迎えられたことは何といてもうれしかった。

その講堂のできるまでは、運動場ではだして体操や運動をするので、時々先生が笛を吹いて生徒を立ち止まらせ、周囲の小石を拾わされたことも思い出の一つである。

また、5年生のときから大歳小は師範学校の代用附属校となり、若い教生先生が派遣されるようになって雰囲気が変わってきた。親たちが、附属になると優秀な先生が来られるようになるのと話すのを聞いて、格が上がったように思ったものである。

40余人の同級生も残り少なくなり、年1回の同級会に元気で集まるのも5～6人となった。

3. 父の訓戒より

大正14年卒 高井 大谷 猛夫

私が大歳小学校尋常科に入学したのは、大正8年4月、ちょうど1年生の教科書に、ハナ・ハト・マメ・マスの「尋常小学校国語読本」が使用され始めたころのことである。

入学式を終えて帰宅した際、父親から受けた訓戒は今も鮮明に記憶している。私事で恐縮だが、父の言葉は「入学おめでとう。今後のために言っておきたいことがある。それは3歳上の昌夫兄が気弱な性格で将来を心配していたところ、お前が生まれた。弟のお前は元気で強い精神力を持った人間に育つようにと願って『猛夫』と名付けた。お前の刺激を受けて兄の性格が変わってくれることを、父も母も願っている。この気持ちを忘れずに、兄弟仲よく励まし合い、学校生活を頑張ってくれ。頼むぞ」というものであった。幼少の私にも父親の気持ちが少しは理解でき、その後努力したつもりである。気弱といわれたその兄も次第に性格も変わり、師範学校を卒業して教師となったが、25歳の若さで惜しくも他界した。

そのほか、在校6年間の思い出は尽きない。当時の3棟の校舎の情景。元日・紀元節・天長節・明治節に講堂で式典が行われたこと。校長先生がモーニング姿に白手袋で、うやうやしく教育勅語を読まれ、悪童共も神妙に頭を下げた厳粛な式典のこと。下校時には、黒川市あたりの店屋をのぞき、あぜ道で道草をくったこと……走馬燈のようである。

4. 思い出あれこれ

昭和2年卒 嶺村 康

人生80年代、傘寿を過ぎた今は昔、昭和2年3月尋常科、4年3月高等科の卒業。

学校創立当時、校名は論議の結果校地内に下湯田鎮守の大歳社（大字矢原小字大歳1498）があったので大歳尋常高等小学校となり、ついでに矢原朝田村であった村名も大歳村とした。2つの名付けの親となった大歳様は子供からも親しまれたが、現在は校地外数メートルの地から見守っている。

講堂を中に平屋建外廊下の校舎が並んだ教室が我が学び舎である。2人掛けの机で右側に硯箱が付いていたのも忘れられない。当時の建物で残っているものは何も無い。

同級生55人中生き残り18人、その半数ぐらいが元気老人、80年代は厳しい道。

仰げば尊しわが師の恩。思い出に残る最大のものは70年の昔を思い出す、袴姿で優しい小野ヨシコ先生。背の高いきびきびとした重枝幸一先生。3年生のとき関東大震災、松田福信先生のお話、忘れられない恐ろしさ。3年間勉強に躰に厳しかった望月（柴田）宗助先生。高等科男子宮崎匠先生。卒業時の佐藤一人先生も昨年末に亡くなられ、担任の先生皆亡くなられて残念。高等科女子は上田勘助先生、音楽が得意でした。水泳が上達したのは宮崎先生のお陰。夏は泳ぎと魚取り、水は清き故郷。お別れの挨拶が、「酒は飲むな、煙草は吸うな」思い出は尽きない恩師の面影。

5. さまざまな出会い

昭和3年卒 中野正子

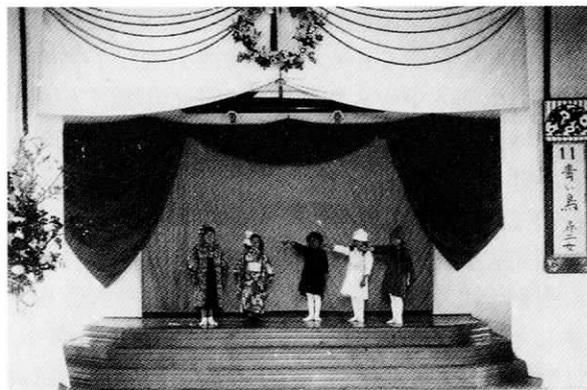
1年 大正時代、大歳小は代用附属小学校で素晴らしい先生方だった。私は父の転任で湯田小から大歳小へ転校したところ、ひどいじめにあい悲しい毎日でつい宿題を忘れて残された。父は本を引き裂き新聞に包んで、「これを先生に持って行け」と。翌日、中年の女先生はやさしく「本をかしてあげる」とひとこと。その後「父と先生の無言の教育」が、79歳の今日まで、何事も即時処理しなくては気がすまない性格にして下さった。幸せな出会いと感謝の日々。

2年 3学期、大病で全部欠席した終業式の日、若い美しい女先生が「1・2学期とてもよくできたのに3学期休んでおしかったので、これは先生からのお祝い」といわれ、ふらふらの病後が急に元気づき、3年に向かって努力した。

3年・4年 素晴らしい達筆の男先生で、習字の時間になるとふしぎに私の手を持って筆跡を教えられた。学年末には防府天満宮や展覧会の清書を書かされ、女学校では掛軸など書かされた。この先生方の出会いで43年間も卒業証書や各種の賞状、その上大歳小体育館新築には正面と音楽室に校歌を書かされたことはよい思い出になった。

5年・6年 スポーツの好きな男先生で、再々この賞状を拝めといばって見せられた。学習は机の順に読まされ、しくじるとすぐ全員朝田神社へ行けと命令され、神前の広場に立たされた。一人しくじると一日中でも立たされて、教科が進まないというきびしい授業が再三だった。

私は当時級長で、誰か悪いことをするとすぐ「中野出てこい」と前に出され、「なぜ注意してよくしないか」と私ばかり叱られた。家では母が入院中で、昔は病院に食事を運ばなければならず、私が作り大雪の中を往復したものです。泣く弟のお守もあり、遅参すると「級長が遅れるとは何事だ」と、一口も私の悲しいわけを聞いて下さらなかった。夜、父の採点の手伝いをしながら、上記のような話をして先生になりたいといったら、父は喜んで早速準備の勉強をさせてくれた。おかげで友人より早く先生になることができ、児童の心を聞くあたたかい学級作りに48年間努力したつもりである。退職後今も算・国を通してシワシワの独居老婆ながら若き日の“思いやり”の指導を忘れず、一人ぼっちでがんばっている。今、開校百年を祝い、また同年輩で戦死・病死された方々のご冥福をお祈りしつつペンをおく。



学芸会 (大正12年)

6. 五地蔵の思い出

昭和6年卒 乗安 靖

大歳尋常高等小学校へ入学したのは大正14年。期待と不安の入り交じった緊張した気持ちで、母に連れられて校門をくぐった。一年生は男女で40数名の1クラスであった。

当時、学校は、山口県師範学校の代用附属校になっていて、卒年次の学生が、3か月くらい教育実習に来ていた。1クラスに2～4名の配属であった。それを児童は「教生先生」と呼んで親しんでいた。勉強もさることながら、休み時間などよく遊んで貰った。この附属校になっていることは、当時、村民の一つの誇りでもあった。次の拙文は、1年生の時の思い出の1コマである。

3学期のある日、I君が弁当に餅を持って来た。残りであったか、「誰かいらんか」と言ったので、とっさに悪戯鬼どもI君を取り囲んでわいわい。折り悪しく、担任の小野淑子先生がやかんを提げて帰って来られた。早速お説教。「ごそごそしないで、きちんと立っているのですよ」教壇に六地蔵ならぬ五地蔵。神妙に直立不動。昼休み、外に出て行く友のからかうような目。まことにばつがわるい。「くそ、おぼえちよれよ」睨み返す。外は賑やかである。「おい、お前行って来いや」「お前行けーや」謝りに行く代表のぬすくり合いである。そのうち廊下に足音。小野先生の「これからは、お行儀のよい子になりましょうね」の優しい言葉に涙が落ちた。許されて教壇を下りる。午後の始業の鐘。五地蔵の一人、今は懐かしい思い出である。

7. 懐かしき大歳高等尋常小学校

昭和7年高等科卒 相模原市 山口貞巳 (旧姓 藤村)

私たち、大正6～7年生まれの同級生は、満州事変の頃、高等科卒業ですから、63年前のことになります。

当時はまだ、時局の風は、子供達にさほどの影響がなく、進学者も、小学、高等科ともに、2～3名でしたから、その他の我々は、のんびりと「良く学び、よく遊」んだもので、「学」の字にも「アソブ」とルビがついていたつもりでした。

山口師範附属の当学校では、たとえば、最新設備の理科教室、五線譜による音楽教育など、当時、東京の学校にも無かった進歩的な授業が、優秀な先生方によりおこなわれていました。

また、運動会の日には師範学校（「本校」と言っていた）の学生がブラスバンドを演奏してくれて、近隣の学校には鼻が高かったものでした。

そんな恵まれた教育環境にも拘らず、我々、一部の悪童は教室の外は勿論、若い教生先生の授業中、真面目な生徒であった記憶は全く無く、大人になって初めて反省したようなわけで、以来ずっと悔悟の気持ちは持ち続けているものです。

当時の先生方には、大層、遅まきながら、深くお詫びしたいと思っているものです。思い出一杯、誇り一杯の大歳小学校。

8. 夭逝したオリンピック選手の思い出

昭和8年卒 上矢原 藤井梅子 (旧姓 佐伯)

「前畑ガンバレ」「前畑ガンバレ」…日本人を熱狂させた、あの昭和11年の第11回オリンピックベルリン大会。その大会に前畑選手と共に水泳選手（自由形）として出場された、大歳出身の松村昶子さんとの思い出は、尽きることがございません。

松村さんとは、大歳小学校・山口高女と11年間学窓をと共にいたしました。小学校2年生から6年卒業までの担任は北瀬茂先生で、水泳指導に大変熱心な先生でもありました。当時、大歳小学校は水泳が盛んでした。プールがございませんでしたので、榎野川の八光面（石津橋の下）で練習しておりました。

そのころ、近辺の学校による学童大会が山口高女のプールで開催されておりました。大歳小の先輩たちも目覚ましい活躍をみせて、優秀な成績を上げておりましたが、特に松村さんは常にトップの存在でした。

小学校卒業と同時に、私たち3名は山口高女に入学し、いずれも水泳部に入部いたしました。ところが、そのコーチに6年生まで担任していただいた北瀬先生が来校されるようになりまして、そのときの驚きと喜びは今も忘れられません。この名コーチのお陰でしょうか、毎年、福岡市大濠プールで開催される西日本水泳大会の山口県代表選手の中に、大歳小学校出身者が5名もいたことがあり、鼻を高くしたものです。

松村さんは、大会のある度に記録を更新され、注目の人でした。昭和11年、高女4年生のとき、オリンピック最終予選東京大会で自己最高記録を出され、ベルリン行きの切符を手にしたのです。このニュースが流れましたとき、大歳小学校・山口高女はもとより山口市民全員が喜びに沸き上がりました。大きな出来事でした。

この快挙は、松村さん自身の天性と努力のたまものであり、北瀬先生の良き指導の成果だったと報じられました。

このときの日本選手団は、下関港から関釜連絡船で大陸に渡り、シベリア鉄道経由でベルリンに向かわれました。私は学校代表として下関までテープを持って見送りに行きました。胸に日の丸のブレザー姿の松村さんに、精一杯の声援を送ったあの日のことが、昨日の日のように私の脳裏に焼きついています。

松村さんは、誰からも愛される人柄の方でしたが、残念ながら25歳の若さで病に倒れ、他界されました。惜しまれてなりません。

「前畑ガンバレ」のあの名実況中継とともに、大歳の誇りとして松村昶子さんを忘れることができません。



ベルリンオリンピック女子水泳選手団
左から4人目松村昶子さん、同7人目前畑秀子さん

9. 八光面のプール

昭和12年卒 福永昌巳

開校はどんな年だったのか気になる。調べてみる。第二次伊藤博文内閣、日清休戦条約が調印される。こんなところが眼をひく。

私達の小学校入学は、昭和6年である。男女共学、40名ばかりのクラスだった。代用附属小学校で、教生先生が来ていた。1年生受け持ちは確か中尾先生だった。優しい先生で、学校は楽しい所と印象づけられた。小学3年頃になると、川開きが6月に開かれた。

川で泳がれるのが嬉しくて、桜の花の咲く頃から待ち遠しかった。水泳大歳が有名になる頃である。水泳には学校あげて、力を入れていたと思う。県対で優勝したことが、私にも伝わってきたのである。朝田神社の裏に川幅の広い所があって、25メートルのプールが川の中にできた。ロープを3本張ったコースができた。先生は白線の2本はいった水泳帽子をかぶり、胸にストップウォッチを、口に笛をくわえ、格好が良いのである。あの帽子をくれんかと思ったこともある。ここで懸命にタイムを争ったものである。

我等にとっての名所があった。桑畑である。現在の河川公園がその場所である。秋になると、紫色の実がタワウに実っていたのである。紫色に唇をそめたガキ共が走り廻る所、遊び場である。川には清流があり、魚も沢山とれた。ゴリ引きの大人の人をよく見かけた。土手のまわりは深い森だった。空気はうまかった。自然は豊かだった。

私達も古稀を過ぎその一年生である。せめて余生を感動あるものにしたい。

10. 6年間の思い出

昭和13年卒 福岡県 平川金四郎

我々は「ハナハト マメマス…」で始まる国語読本を用いた最後の学年である。3年生までは藤井先生が担任で、4年生になると担任が百合野先生に変わった。細身の先生は真面目一辺倒の授業をされたので、面白くなくよく騒いだ。当時は師範学校の附属小学校であったので、教生という名の実習生が差し向けられ、数か月間授業に参加した。そして、これらの先生と手を取りあって遊んだ。3月のお別れの時には大の男が幼い生徒を前にして、目に一杯涙を浮かべながら挨拶をした。

5年生の夏休みに百合野先生は病に倒れ、新学期が始まっても顔を出されず、容体は日々悪化した。誰言うもなく先生の全快を祈って全員で氏神様へお百度を踏むようになった。その頃は新しい担任に富永先生が赴任された。教育の熱意に燃えた立派な先生であった。しかし百合野先生の容体は悪化の一途を辿りついに不帰の客となられた。私は他の先生に伴われて彦島へ弔辞を読みに行った。「噫、悲しい哉、悲しい哉、呼べど叫べど帰らぬ先生の御霊…」と読み始めたら、列席の中から嗚咽の音が沸いてきた。私は泣いてはいけなと論されていたので必死で読み上げた。校庭の西に立つ大きな2本のポプラを見上げて、涙した日を忘れない。

5年生の終わりには、富永先生入魂の指導で忠臣蔵が学芸会での出し物となり、皆で一生懸命に演出した。6年生になった時、日中戦争が勃発し一気に戦時色が濃くなった。しかし、今も学校の帰り黒川市で自転車屋、鍛冶屋、豆腐屋などの店先を見ては道草を食いながら帰った日々が忘れ難い。

11. 往還を通った6年間

昭和14年卒 浦和市 秋貞雅祥

家の近くを流れている小川が大歳村と湯田町の境でしたので、湯田小学校より何倍か遠い大歳小学校に通うことになりました。往還と呼んでいた舗装されていない大通り(旧国道)を6年間歩いたのです。いつの頃からか、おんぼろバスが土ぼこりをあげて時々通ることもありました。

大歳村は細長く、この村の中に大歳駅、湯田駅、それに矢原駅がありました。小郡と山口市を結ぶ唯一の交通機関である鉄道の意義は、今では想像できない程大きかったと思います。学年途中、大阪へ転校した同級生から「大阪は大都会、工場の煙は空を暗くし、市内には大きな駅が幾つかある」という手紙が来ました。私は子供心に、大歳にも「青い灯、赤い灯道頓堀の大阪」に負けない3つの駅があると思ったものでした。

昭和8年に入学した同級生は、男女合わせて50人位で、この1クラスを1年から6年まで担任して下さったのが、竹村清先生でした。先生は県下のトップスイマーでしたので、我々は榎野川で水泳を鍛えられたものです。

当時の小学生はみな野生児で、周辺環境は悪童どもを十分満足させてくれました。校庭の隅に足洗い場池があり、コンクリート塀の上を歩いて、泥水の中に落ち、冬の空っ風の強い往還を自宅まで着替えに帰ったり、学校菜園で冬眠中の蛇に驚いたり。昭和初期の小学校の思い出は、古稀を迎えようとする私に、いつまでも生き生きと生き続けております。

12. 平和を願って

昭和17年卒 藤村武子

私達が大歳小学校に入学したのが、昭和11年4月でした。翌年支那事変が始まり、昭和16年に大東亜戦争、終戦が昭和20年ですから、小学校在学中は殆ど戦争中でした。

当時の1学級は、男女合わせて60人程でしたが、平和の時代を見ずして亡くなられた方々の顔が思い出されます。

藤川孝生君は、1年生に入学した頃から体が不自由で、徒競走では皆と半周近くも遅れるという状態でした。その後は学校も休みがちで、みんなからも忘れがちのようでした。ところが、卒業生名簿の中に彼の名があるのを見付け、学校の配慮に心暖まるものを感じました。孝生君の病気は、体の筋肉が硬くなっていく筋ジストロフィー症ではなかったかと思いますが、ご両親の手厚い看護があったにもかかわらず、孤独の中で若くしてこの世を去った心情を察すると、ほんとうに不憫でなりません。

終戦の前日、学徒動員のため光海軍工廠で就業中、B29の爆撃で防空壕の中で亡くなられた伊藤親子さん。あの時の思いは私の脳裏に焼きついて離れません。また、頭の良かった正司喜久子さんは、山口高女に入学後病気のため亡くなられています。

終戦から50年、老いの境遇に入った今日、櫛の歯の抜けるような訃報を聞きながら、平和な時代であれば元気に活躍できたであろう亡き友を偲びつつ、いつまでも平和の続くことを願ってやみません。

13. 農場の思い出

昭和17年卒 萩原良人

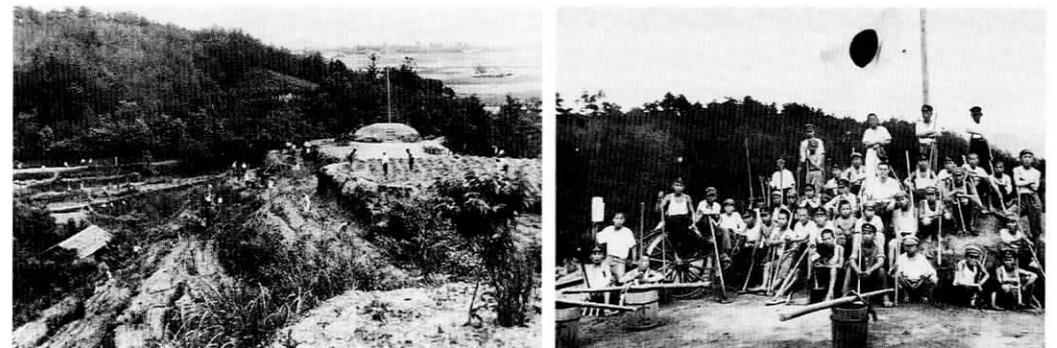
私達が高等科の頃、勝井に農場があって男子だけで管理していた。先輩がいつの頃から開墾していたのか知らないが、堤がありその下側に、もと水田であったと思われる5畝位の畑と、西側の小高い山林を切り倒して等高線状に幅2~3メートル位で横に長く4~5段に開墾した畑があった。その一部を継続して開墾させられた。面積の拡張に努め、ほぼ完成させた。

当時は食糧難の時代で開墾地は甘藷・大根・小麦、畑地には茄子・甘藍・馬鈴薯・蒟蒻等の野菜を作っていた。茄子は当時大歳ナスとって有名であった。栽培するといっても化学肥料は殆どなく石灰や堆肥、下肥(人糞尿)を肥料としていた。草や藁で堆肥を作り、学校から二人で肥桶を担いで行った。腹が空くと大根を生で齧ることを覚えたのもこの頃だった。おいしかったものだ。あるとき蒟蒻芋を生で食べさせられて、喉をえぐるようなエグ味のあったことは記憶に新しい。

丘の南側に民家の雑木林が少し残っていた。その横は土を削り取った跡で北側は崖のようになっていて、かなりの広場になっていた。そこには農具小屋があり、また横穴と縦穴があった。横穴では鶏と兎を当番にて飼育していた。縦穴を3メートル位下りると底で、そこから横に2~3メートルの穴があり藁やもみ殻を敷いて甘藷や大根など貯蔵していた。出し入れは釣瓶を利用していたが、私達は梯子か素手で上り下りさせられ怖かった思い出がある。みんなは上手でした。臆病者の私は1、2度位しか下りたことはなかった。

この思い出の場所も卒業後どうなったか知るよしもないが、昔の夢のごとく面影すら今では見当たらないのが残念だ。

(注) 蒟蒻は風船爆弾の風船用の糊として使用されていた。



14. 2600人のひとり

昭和18年卒 宮成益美

「昔のことだが、ひと言お前に文句が言いたい」
還暦を迎えた年の同窓会でFが言う。臍すねに多くの傷を持つ身、まずは謝る。

「…で？」

「夏休み帳の天気、お前のを写したら、それが大嘘。お前が立たされたので、これはヤバイと思ったら、案の定、俺も立たされた」

夏は川に決まっていた。高田をホーム・グラウンドに、新土手、八甲面（何故か、ハッコウベンと訛った。両岸に杭が打たれ、ロープを張り渡すと25メートルのプールとなった。オリンピック選手の松村昶すけさんは、ここで育ったと聞く。）、新井手、三作原へと高歩き。

紀元2600年記念式典は昭和15年。「目出度きことに、大歳村の人口は2,600人である。この光栄ある村民の諸君は、お国に尽くす立派な人になれ…」と訓示された。…が、期待には応えられなかった。

今、大歳の人口は幾らかはよく知らない。1万人ぐらいになったのであろうか。往時とは様変わりして発展・隆盛しつつあるが、故郷はやはり懐かしい。その母校から有為の人材が輩出することを信じている。

15. 戦時の大歳小

元大歳小学校教諭 中矢原 百濟キヨ子

平成生まれのお子たちが元気に通学なさる今時分に、古い話で笑われると思ひながら、年寄りじみたことを書いてしまいました。

私は未熟な教師で、若い頃の2～3年間大歳小学校にお世話になりました。ちょうど昭和18年から終戦までで、男は兵隊でみんな戦場に行き、女ばかり残った時代のことで

す。そのころは、食糧も衣料も生活物資も、すべて欠乏していました。小学校でも食糧増産をと、4年生以上は鋤くわや鎌かまを取って河原畑や校庭にさつまいもを植えたり、高等科は勝井の農場へ、また馬庭や阿仙原の学校林の手入れにも行きました。勉強はほとんどできないような状態でした。

当時、学校の教室や講堂には国内守備隊の兵隊さんが寝泊まりをしておりました。毎日のように運動場で激しい戦闘訓練をしていました。だが、真夏の訓練にもかかわらず、汗を流す風呂もなく、夕方は千代丸川で水浴していた情景が強く印象に残っています。

戦争が終わって、今年50年になります。世の中は、ロケットで人間が宇宙へ飛び出すことのできる時代になりました。もう世界は一つです。目をつぶりますと、大歳地区に古くから住んでいた古代人の顔が目に浮かびます。この朝田古墳の人骨も、現在の私たちも、同じ山口盆地の住人としていつまでも平和に生きつづけたいと祈っています。

16. 小学生の頃

昭和19年卒 粟屋三郎

私は、昭和13年4月大歳小学校に入学しましたが、入学したときから国民学校と呼ばれていたと思います。

家は今井町にありましたので、片道約4キロの、当時は往還おうかんと呼んでいた旧国道を通ったものです。登校時は、地区の者が一箇所に集まり、高等科（小学校6年の後もう2年通学する生徒）の人の命令で相撲を取らされ、やがて「さあ、出発じゃ」の号令。1年生から高等科までの十数人の集団が列を作って往還を走ります。恐ろしい高等科のお兄ちゃんに尻を叩かれ、ランドセルの中で本や筆箱が「カタ、コト、カタ、コト」と調子をとってくれる音を背中に感じながら走った長い道のりでした。

1年生から3年生までは富永先生でしたが、先生というより恐いお父さんという感じでした。先生が子供を誉めるときは、「良くできた、さあ来い、抱いてやろう」と、抱き上げて教室の机の間を歩かれました。抱かれた子供は、意気揚々と上から下を、他の連中はうらやまし気に上を見上げたものです。

4年生からは原本先生でした。まだ独身の若い先生で、兄のように感じたのか、みんな先生にまつわりついて困らせたこともあったように思います。

考えてみますと、あれから50数年がたっていますが、いろいろなことが懐かしく思い出されます。

17. 肝油の味とともに

昭和20年卒 藤井盛男

私達の小学生時代は戦争の真っ最中だった。十分な栄養が取れないというのか、また健康で元気な子供にと願ってのことであろうか、クラス全員が肝油を飲まされていた。弁当が終わって、講堂と南側の教室の間の廊下で、先生から一定量あて口に注入していただいていたが、上を向いて口を開ける様は、燕の子が親から餌をもらうような格好だった。その肝油は鯨油とかで苦味が強く、後味が悪いので星形のコンペー糖を1つずつもらったが、悪童は2度もらったり、1度に多く取ったりして先生に怒られたものである。

3年生のころだった。全校で30人ぐらいに給食が出されていた。体質が弱い子供達だったか、その対象児の選考はよくわからないが、私もその仲間入りをしていた。麦御飯に味噌汁・魚・野菜のいわゆる日本料理。暖かい味噌汁のおいしかった味は、今もって忘れることができない。

ところで、私宅の裏山に梅の樹がある。1940年の“皇紀2600年”の祝に全校児童に分配されたものであるが、実のならない山吹と同じで、55年たったのに今もって結実したことがない。しかし、この樹を見るたびに1年生だった当事を思い出し、よく歌った「紀元二千六百年の歌」が脳裏をよぎる。

金鶏輝く日本の 栄えある光身にうけて いまこそ祝えこの朝あした
紀元は二千六百年 あゝ一億の胸はなる

18. 50年前を回顧して

昭和21年卒 山根隆太郎

小学校時代、その思い出はすでに遠いものになりつつあります。

戦争という時代を背景に、厳しい時でもありましたが、すこしずつ皆の中の自分を見いだす社会的意識が成長しつつある時期でありました。

ともあれ、昔も今も変わらない、読み書きソロバン等でのピカピカの小学一年生から始まる教育制度は、基礎の知識を得る大切な時期であるのだと、今更ながら教育制度の必要性和重要性を感じます。私ども、昭和8年生まれの小学校6年卒業は昭和21年3月であり、第二次大戦の終結の翌年のことです。今更ながら、どさくさの最中であつたと思ひ出します。あの時から既に半世紀を過ぎたことになるのも驚きであります。

当時の風景は学校からの行き帰りの道端には田んぼも多く、秋には穀殻の山が数多く散見されたのが記憶に残る田舎の風景でした。今ではその牧歌的風景も見当たらず、家また家ばかりになりました。

終戦時には子供心ながら、日本国民の誰もが、明日をも分らない不安を感じていたのが事実でした。この不安も次第に無事であることが分かり、落ちつきを取り戻し、新憲法による人権感覚も自らのものになってまいりました。

世の中は変わりましたが、問題もございます。これからは、社会のひとりとしての責任を感じる生き方を会得し、夢多き人に育っていただきたいと思ひます。

19. 戦時中の思い出

昭和23年卒 下矢原 藤村尚美

小学校（国民学校）3年生の初め頃まで東京に住んでいた。今は亡き父（大歳小卒）が近衛師団の将校で、母も東京で旭幼稚園長をしていたからである。ところが昭和19年5月ごろ太平洋戦争が激化し、文部省令で郷里がある者は疎開せよと今住む所へ戻り、農業を営んだ。みんなすばらしい友達で直ぐ仲良しになった。当時はすべて戦時色であり良い悪いは別として士気を鼓舞するつもりで軍歌を歌う毎日であった。食料不足となり校庭を開墾したり、勝井の修練農場へも食糧増産とかで勤労奉仕、国道の両側にはゴマを植えたり、運動場には防空壕を造る、薩摩芋を植えるなど額に汗して愚痴をこぼさずよく頑張った。

昭和20年になり4年生の国語の時間などは「神州不滅」「米英撃滅」などと筆をふるった。防空頭巾をかぶり机の下にもぐったり、防空壕への避難訓練も試みた。校舎の一部には兵隊が寝泊まりし、朝田神社では在郷軍人が本土決戦に備え竹やりの練習に余念がなかった。樫野川で水泳の最中に上空をB29の大編隊飛行があり、敵が憎かったこともあり、将来は特攻隊になると本気で言っていたものである。奉仕作業は銃後の守りで当然のことであつたが、慣れない手つきで近所の農家の稲刈りや麦刈り、田圃のめい虫駆除では田螺をとり母に佃煮を食べさせて貰い格別おいしかったことを思い出す今日この頃である。

20. ピアノとポプラの葉

昭和25年卒 渡邊憲一

父の勤務上外地で2年半過ごした私は、第二次世界大戦の終わった翌年9月に、3年生として転校してきました。

その当時の校舎は、講堂を真ん中に東西2棟ずつ並んで、渡り廊下で結ばれていました。講堂の東側の校舎との中庭には、開校時に植えられたのか講堂の屋根を越えて高く伸びたポプラの木が、数本そびえていました。黄色に色づく頃になると、葉が舞い降りて庭一面を黄一色に染め変えていました。戦後の遊び道具もない私達は、ポプラの葉の茎を引っ張り合って勝負を楽しんだものです。

そんなとき、下校時間が近づくころに決まって講堂からモーツァルトの「トルコ行進曲」が流れていました。女学校を出られて間もない担任の西山貞子先生が熱心にピアノを練習しておられたのです。今もその姿が思い出されます。

現在のように、テレビやステレオが普及して音楽が身の周りに溢れている時代ではとても想像し難いことですが、当時の私にとって、クラシック音楽は初めての出会いであり、感銘を覚えたものです。

聞くとところによると、西山先生は若くして亡くなられたということですが、モーツァルトの曲に合わせてポプラの葉が舞う情景、あのロマンチックな風情を忘れることができません。

21. 戦中、戦後の学校

昭和26年卒 石崎康二

腕白坊主が小学校へ入学となり、なにか別世界に行くように神妙に入学式。校長先生の教育勸語の朗唱を在校生に見習って頭を下げて聞いている長い時間がなんともつらかった。

運動場の隅に防空壕があり女の子は中に入ることを大変怖がっていた。授業を受ける教室も1年から2年にかけて自宅よりリンゴ箱に新聞を貼り教科書をもって養元寺の畳の上で授業を受けた時期もあった。当時学校には兵隊さんが渡り廊下に大砲を設置し、教室・講堂に寝泊まりし詰めておられた。

通学も千代丸橋の下に井出があり、川遊びをしながら、またよく泳ぎに行ったものである。当時、高学年の児童は苗しろ田の蛾チョウ取りに廻っていたが、入学前はそれについて苗しろ田に入り叱られ、祖父に物置の中に入れられ大きな声で唄を歌ったと家族の者が話していた。

2年生の8月終戦。その時の感情は今あまり記憶にないが、戦後、給食が始まりコッペパンと脱脂粉乳が出ておいしく食べた。家で麦飯は食べられたがパンは珍しさもあった。校庭にさつま芋の苗床が作られ、落ち葉拾いをした。高学年が畑を耕してさつま芋を作っていた。自分たちが高学年になったときは学校田で田植えをして収穫し、女子がむすびを作り全員でおいしく食べた。入学した1年生の担任は原田先生で最後の6年生は三井先生、校長先生は右田先生が今も記憶に残って思い出深い。

22. 下校の楽しみ

昭和28年卒 倉重泰昌

同窓会の話をすると同僚は一樣に反応した。小学校の？ なんて珍しい——そう、私達の学校はコンパクトで仲良しで誇り高く、同期会も4回を数える。

終戦直後の入学時は、多くの児童が戦争中に使った防空ズキン姿で通学した。私といえば、今思えばとてもモダンな母手づくりの野球帽や、ボタン式のズキンだったが、皆と同じものでないのが恥ずかしく、通学途中でそっとカバンに仕舞ったのを思い出す。

思い出の風景の一つは下校時のことだ。校門にさよならして一直線に朝田神社へ。次の瓦屋では、まだ乾いていない商品にいたずらして養元寺へ。そして造り酒屋を経て醤油屋へ。犬としばしたわむれ、時に黒砂糖のおやつをもらい、登校時のたっぷり2倍の時間をかけて家路につくのが日課だった。

ジャーナリズムの原点「好奇心」は、この時芽生えたのかも知れない。

もう一つの風景は、田んぼ野球である。ボールが稲の切り株に当たり、まるでラグビーのような試合だったが、祖父手づくりのバットで、暗くなるまで懸命に遊んだ。田で遊ぶと後で耕しにくく嫌われるのだが、夢中な子ども達の姿に、父は何も言わなかった。

不思議と勉強の思い出は無い。教室に漂う弁当温め器からの臭いだけは今も鮮明だ。

卒業から40年余。同窓78名のうち、亡くなったり連絡がつかなくなった人11名。ちょっぴり寂しく残念に思う。

23. 戦後の混乱の中で

昭和29年卒 石光一成

私達が入学したのは昭和23年4月。終戦後2年余りということで、敗戦の面影がまだまだ色濃く残っている中での、学校生活のスタートでした。

今、手許にはありませんが、滑り台回りで、恐らく入学の記念写真であったろうと思いますが、1学級25名位の中でズックの靴を履いているのはただ1人。後は全員、ゴム草履等で、大変に見すばらしい格好であったことを記憶しております。

1学年2クラスで、2年に進級の際、編成替えがありました。その後は6年まで、編成替えは一度もなく、したがってお互い気心が知れたまとまりのあるクラスでした。

3年の時でした。私共の担任の先生は非常にタバコ好きで、タバコを持つ指の回りは茶色っぽくなっておる程でした。授業中も時に吸っておられ、これは何でもいいことではない、抗議しようということで、何人かで直談判したところ、即座に「分かった」ということで聞き容れて頂きました。(そのせいではないんでしょうが、現在は私自身、1日3箱でも足りない状況です)

その頃、お若い松岡校長が赴任されました。大変気さくな校長先生で、私共みんなが慕っておりました。しかし、その年の12月には急逝され、大きなショックを受けました。教えを受けたのはわずかの間でしたが、先生の思い出は、40年以上過ぎた今でも鮮明に残っております。

24. 思い出

昭和31年卒 杉山眞士

小学校1年の担任は、北村先生。とてもよく親切に教えてもらったこと。中清水の家に遊びに行ったこと。母が米と卵を持っていけとことづけたこと。女の子ばかりの家庭で、帰りにチョコレートとチューインガムをもらって、大変嬉しく思ったものである。

小学校3年のとき、警察予備隊から保安隊(現在の自衛隊)に改編し、その募集を公民館の掲示板に当時のM・P(進駐軍)が貼っているのを見て、クラスの男子を集めて、艦砲射撃だといって全員が石を投げてやっつけた。そしたら、その学期の途中で担任の先生が他の遠い学校に転任になったこと。その先生は、「君のことは、一生忘れない」といって転校されたことを覚えている。M・Pをやっつけて、なぜ先生が急に転校になったのか、その当時は事情がわからなかった。「今回はアメリカに負けたが、今度はブラジルに移住し、そこを日本のものにして燃料基地にすれば、戦争に勝てる」と戦争から帰ってきた叔父たちにいつも言われていたものだから。

その後、松岡校長時代に小学校を建て替える話があり、図面ができたころ急に脳内出血で亡くなられ、学校葬をしたことを覚えている。松岡文庫ができたのは、その校長先生の本を寄付していただいたもので、ものすごい量の本だと感心したものである。

5年のとき、新校舎ができた。当時は県内のモデル校舎で、各学年ごとに担任の先生の部屋が用意されていた。そのとき僕は、当時の講堂は僕の祖父が設計し200円もの大金を寄付したと父から聞いていたのを思い出した。そこで、自分もモデル校舎のためになにかできるはずと考え、毎日、冬の寒い時期に遠い所は、平川の九田川まで「せり」を取りに行き、市場に出荷して、2,000円貯まった。なににでもいいから使ってくれと、そのお金を学校に寄付したが、別になにもなかった。

現在は、その思い出の講堂(罰で掃除をさせられた)も、モデル校舎もなにもなくなっている。

草刈一郎先生になって、吉敷の出水の学校林に植林や中刈りに行き、大きな山火事になったこと。遠足で平川の高倉山(荒神様の昔の山)に登ったこと。先生の大きな、大きなむすび(顔よりも大きく、中には梅干しが10個も入っていた)を石津橋で見たこと。更に、いわゆる「たたり」の大歳様を持って、榎野川で神様と一緒に遊び、泳いだこと。

学校を卒業し、社会人になってからも、校庭の池に錦鯉を内緒で寄贈していたことも、今でもすばらしい思い出になっている。

ほかに、書けば数えきれない思い出があるが、最後に一つだけ特筆したいことがある。僕のその後、社会人になってから一つの自訓としていることがある。

それは、学校時代から人の欠点を見つけては、おびいていた。しかし「その人がいくら努力しても直せないことは、絶対言っはいけない。それは差別である」と先生から言われたことである。大きい、小さい、顔が悪い、身体障害者等々。その後、僕は、社会人になっても、そのことだけは現在も守っているし、他人にも、結婚問題の相談があってもその教えを伝えている。

25. 大歳小での思い出

元大歳小学校教諭 草刈 一郎

私が大歳小に着任したのは、確か昭和28年の4月ではなかったかと思えます。

私が着任した年、松岡留治さんが若干36歳の若さで校長として着任され、着任されると同時に、以前から話に出ていた12教室の新築ならびに特別教室等の大改築が、その実現に向かって動き出しました。その第1期工事である第5棟校舎の移転工事が6月頃から始まり、2学期の終わる頃にはほぼ完成しました。しかし、残念なことに校舎の建築に異常なまでに情熱を傾けておられた松岡校長が、冬休みに入った翌日に急死されたのでした。

この時のPTA会長は田中頼三さんで、建設委員長は岩富の宮田寛次さんでした。田中さんは、戦後アメリカの雑誌に「この戦争中に日本軍に二人の名将軍がいた。一人は沖縄戦の司令官だった牛島中将で、今一人はルンガ沖夜戦の田中頼三将軍である」とまで書かれた方でした。校舎建設に関し松岡・田中・宮田の3人で夜も昼もなく頑張っておられただけに、松岡校長の急死に田中会長・宮田さんの失望は大変なものでした。

松岡校長は読書家で、残された書籍は約1万冊に達していました。松岡さんはまだ独身で、老いたお母さんと2人暮らしでしたが、このお母さんが、書籍を全部大歳小に寄贈されたのです。当時、私が図書主任をやっていた関係もあって、この本の受け入れ計画なり作業一切を私は命ぜられました。もちろん私1人ではどうにもならない大仕事です。全職員のご指導ご協力のもとに手を付けたのですが、何としても相当な予算が必要となります。学校自体としても苦慮されておりましたところ、田中会長さんが、「PTAなり大歳地区民にお願いして山の樹木の枝の下刈り作業をやり、その収入を当てればよい。収入が多い時は松岡さんのお墓を建てて頂く一助にしてもらうのもよいのではないか」と音頭を取って下さったのです。予想以上の収入があり、みんなの力で“松岡文庫”は出来上がりました。話に聞けば、“松岡文庫”はその後県立図書館に寄贈され、今は大歳小内には無いそうである。

松岡さんのお墓は、市内神福寺の裏の小高い丘にあります。

話は変わりますが、私が大歳小に着任する以前に、大歳小では事故や災難といったことが幾回か続いて起きていたようです。そうしたところに松岡校長の急死、続いて用務員さんが勤務時間中に交通事故で死亡されました。こうしたことがきっかけとなって、昔あったことが数々と掘り起こされ、「事故や災難が多いのは、校地内に祭ってあった“大歳様”を校地の外に移したからだ」という様なうわさ話が流れ出しました。私は当時「くだらない迷信や流言飛語に、子ども達が巻き込まれてはならないし、暗い話は大歳地区から追い出さなくてはならない…」と思い立ち、“大歳様について”という研究物をガリ版印刷にして人々に読んで頂きました。ガリ切りや印刷は、同僚の池田先生と北村先生が協力して下さったことを今思い出します。

早いもので私も大歳小から転任して40年近くになり、満で73歳となりました。この間、まことに有り難いことに、大歳小での教え子さん達から同窓会ということで幾度もお招きを頂き、大歳小での思い出話に花を咲かせ、大層懐かしく思ったことでした。

26. だいすき おおとし

昭和32年卒 上矢原 岡本千代子

明治28年開校以来100年。8,500余名の卒業生を送り出した大歳小。

私達が4年生の時に、モデル校舎として建築されたモルタル2階建ての校舎も、平成6年度で姿を消した。各学年毎に指導室なるものが教室に隣接し、先生にとっては研究室であり、休息の場所でもあったろう。一方私達児童にとっては、時として取調べ室に変身する。しかし、ひととおりの説教が終わると、お茶やお菓子が出るがあった。『病気でせぬ限り、めったに口にできなかったバナナ』の時代に育った私達にとっては、説教の内容は既に忘れ、実においしい茶菓子でした。

遊びについても、今では懐かしい思い出でもある。春は、ツバナやツクシを摘み、シーシ葉を噛みながらガヤガヤと遊び、お手玉、おはじきに夕暮れまで没頭した。夏休みは朝から夕方まで榎野川で泳ぎ、飛び込み台になってくれたあの石津橋も、今はもう無い。秋は柿を求めて木登りもした。栗の実も拾って歩いた。冬は雪ダルマを作り、ツララをかじり、缶けりやかくれんぼ、トシャクまで遊び場と化した。

先輩に助けられ、やがて近所の後輩達に伝え、皆で仲よく遊んできた。家族という固い絆の中で、大きな安心感に包まれていた。子離れもできた今、走馬燈のように巡る40年前に想いを馳せ、秋の100周年を精一杯の笑顔で迎えております。ありがとうございます。

27. 昔、そして今

昭和34年卒 三井 裕

小学校を卒業して早いもので36年。「光陰矢の如し」とは本当によく言ったものである。

昨年6月、旧校舎が解体されるとのことで、久しぶりに校舎の中に入る機会を得た。幾多の子供達を見守ってきた旧講堂がないことには、少々寂しさを覚えた。だが、小さいころには高く見えた天井、広く大きく見えた階段や教室に、小さかったころの学校でのことを思い出した。

古いアルバムを開いてみると、理科室前の木製のすべり台の前で北村節子先生と44名のあどけない1年生とが写っている写真がある。誰が誰だかよく分からない位かわいい写真である。さらにページをめくると、太宰府への修学旅行の記念写真。そして88名の卒業生と20名の先生方が写っている卒業写真へと続く。

幼い表情からやや大人びた表情への変化がよく分かり、成長ぶりがうかがえる。

さて、写真を見ながら、物の少ない不便な時代に育ったということを再認識した。学用品、衣服、給食、おやつ、玩具、どれも決して恵まれていたわけではないが、子供なりに工夫し、楽しいことも多くあった。

今は比べるべくもなく物は豊かになったが、心の豊かさはどうであろうか。昨今のいじめや登校拒否の問題を考えると、21世紀を支える心豊かでたくましい子供を育てるためにどうしたらよいか、試行錯誤を繰り返している今日この頃である。

28. 地図から消えた阿仙原

昭和35年卒 横浜市 吉田朝代 (旧姓 小嶋)

私が入学したのは昭和29年。当時、私の家は大歳地区の西の奥まった山の中、知る人ぞ知る秘境(?)阿仙原。学校までは約6キロ。電灯もなく、車も入らず、細い山道の突っつきに3軒の家。そんな集落にも同級生ができました。田村順子ちゃん。5人家族で引っ越して来ました。うれしいうれしい友達でした。ところが、梅雨の集中豪雨で、母子3人濁流にのまれ、彼女は亡くなってしまいました。まだランドセルも新しい1年生の時、私にとってたった3か月の忘れることのできない、大切な大切なクラスメイトでした。

朝日が登ると同時に、ひとりで我が家を出発。ひたすら山道を下ります。髪は逆立ち、息はハアハア、まるで走っている状態です。朝田から大歳までは特別バス通が許可されていましたが、途中からの友達と、ほとんど毎日、田んぼの畦道を通いました。ツバナ、苗代苺、桑の実、熊苺、テツグミ、イヌビワ、柿の実、山栗、しいの実etc。四季の道草を楽しんだものです。帰り道、1人、2人と友達と別れ、馬庭からは、またひとりぼっちの山道。夏は木陰の橋の欄干に頭をもたせ、秋は山の南斜面の陽溜まりの草むらでひとねむり。日暮れにやっと我が家に帰りつく毎日でした。

そんな山里の生活も私が最後の卒業生。阿仙原という集落も地図から消えてゆき、今は何事もなかったかのように、立派な杉林となっています。

29. 雨が降ると…

昭和37年卒 田中 勉

三作は、水郷地帯である。私が、小学校に通っていた頃は、雨が少し降ると、川と道の区別なく、一面が海となることもしばしばであった。雨足が強くなると、学校が早く終わり、下校できるので、それが楽しみであった。

家に帰ると、田んぼに上がった鮒や鯉を採りにすぐに飛び出す。水が引き始めると、逃げ遅れた鮒やなまずがたくさんいた。網を持って魚を追いかけて田の中を走り回り、よく叱られたものである。そして、日が暮れると溝にモジを仕掛けて家に帰り、わくわくしながら朝のくるのを待ったものである。採った魚は、洗いにして酢味噌で食べた。川は、生活に直結していると同時に、遊びの場でもあり、色々なことを教えてくれた。

今は、河川も整備され、雨が降っても一面が海になることは少ない。水の引きもよい。水害も少なくなった。しかし、それと同時に、川は子供たちから遠退き、危険なもの汚いものに変ってしまったように思える。

今も、田んぼが水に浸かると昔と同じようにたくさんの魚が上がってくる。しかし、魚は、子供たちに採られることは少ない。そのかわりに、逃げ遅れた魚をカラスがついばんでいる。たかが30数年、しかし、その間の生活の変化はとてつもなく大きく感じられる。

30. 100年の $\frac{1}{10}$

元大歳小学校教諭 山田 忠子 (旧姓 今橋)

大歳小開校百周年おめでとうございます。歴史と伝統に輝く学校に、その10分の1を在籍勤務させて頂いたことを、心からありがたく感謝申し上げます。

12年間勤務した大殿小に別れを告げ大歳小へ着任。バス停から急いで田んぼ道をかけぬけようとする、麦畑の中の雲雀の囀り、思わず足をとめて“こんにちは”と話しかける。町なかと違うのだから、稲藁をみても電柱にぶつかっても挨拶する気持ちで、先輩の忠告が頭の中をよぎった。仰ぎ見る空は青く元気一杯の子どもの声が降ってくるような思いであった。

故松岡留治校長は様々な教育の理想を描いておられた。その中の1つに6学年12学級の経営が理想的な規模であり、学年2学級の間に指導室として、児童研究・教材研究・資料の收拾等、教育の原点追求への室が設けられた。何ができないのか、どのようにすれば道が開かれるのか、夜遅くまで話し合いに活用したものであった。(平成6年解体された校舎)

松岡校長の膨大な蔵書は、遺族の方の手で寄贈され学校図書館に隣接し松岡文庫として設置された。近より難いような本もあったが、地区の方々も自由に読んでおられた。

戦後、民主教育が叫ばれその落ち着きの中で、主体的学習(児童自らが学びとる学習)が強く考えられるようになった。教師はできるだけ口数を少なくして、児童自らが問題点を見つけ、それを解明していく。自分達の手で調べ、読み、研究が進められ、納得いくまで検討が続く。そのためには教師自らの研究が十分なされねばならず、遠く鳥取県用瀬小研究会(主体的学習)にも出向いたこともある。

教科学習は、児童の特別教育活動ときり離しては考えられない。6年生の文集にも、児童会活動・週番・クラブ・部活動と学校の先頭を進むので忙しいと書いている。小運動会や集会活動は、児童の手によって進められ、教師は相談役として見かじめるので、目は離せなかったが表に出ないため、子供達は喜々として我がことのように行動していた。

教師も自ら進んで授業研究を提出し、研究会のための研究でなく、教師も児童も共に伸びる心豊かな研究が進められ、授業研究の中味も大きく膨らんでいったのである。

昭和40年の研究会のとき、子供達は文集に“参観者が多く体が熱くなった”と記しているが、文字通り教育に燃えた研究会であった。

子供達はよく遊びよく学んだ。家庭学習の自由研究のノートがドサッと提出されると、それに目を通すために嬉しい悲鳴をあげたものであった。一週間がんばって、日曜日には西方便登山が計画された。鎖骨を折ってギブスをかけているのに「どうしてもついでに行く」という友達を、涙ぐましいほどいたわって目的を果たしたときの、満足そうな子らの顔。飼っている伝書鳩を大きい箱に入れて担ぎあげ、山の頂から放して、無事に帰宅したと報告してきた子のはずんだ声…。今も耳の底から離れない。足の悪い友達を毎日リヤカーで送り迎えしていた子の姿も心の中に蘇る。

思い出は尽きない大歳小である。

31. スポーツ少年の思い出

昭和38年卒 石井貫太郎

私が大歳小学校に入学したのは昭和32年の春でした。終戦から12年、生活もだんだん楽になってきたころでした。

昭和33年ごろから各家庭にテレビが普及しはじめ、我が家にも、中風で寝たきりになっていた祖父のために、父が買ってきました。初めて見る野球、そして巨人に入団したばかりの長嶋選手の大活躍。すっかり長嶋選手のファンになりました。学校から帰ると、カバンをほうり出して野球です。近所の友達と、河原や稲刈りの終わった田んぼで、暗くなるまで遊んだものです。

昭和38年に山口国体が開催されることになりました。小学校5年生のころです。競技場の建設が始まり、道路の整備が進められて大歳の周辺もだんだん景色が変わってきました。そして、学校でも開会式のマスゲームに参加ということになり、鼓笛隊が編成され、一生懸命練習したことを覚えています。

山口へ帰って15年。今、私は大歳のサッカースポーツ少年団の監督をしています。この少年団は、余暇の時間を利用して、サッカーを通じて集団の中で身体をきたえ、スポーツ精神を培い、友情を深めることを目的にしています。しかし、私が一番望んでいるのは、自分自身の思い出からも、子供達に楽しい思い出、夢を、たくさんプレゼントすることなのです。

32. 私と大歳小学校

昭和39年卒 白上茂樹

私が大歳小学校にかよっていたころは、30年以上も昔のことです。そのころの記憶を取り戻すことは難しいけれど、よく遊んだ友だちの顔は漠然と思い出す。また自宅が小学校から近かったため、学校が終わるとすぐ家にランドセルを置いて、小学校のグラウンドに飛び出して、日が暮れるまで遊んだことを思い出す。

私には、3人の子供がいます。長男は中学3年生、次男は中学1年生、そして三男は小学3年生です。長男・次男とも大歳小学校の卒業生であり、三男は目下大歳小学校に在学中です。

私は、今現在も大歳小学校の校舎がよくみえる近所に住んでいます。したがって大学生活を除いて、大歳小学校といつも隣合わせの生活をしてまいりました。春夏秋冬、いつも目の前に眺めているわけです。そのためでしょうか、校舎や体育館は新しくなりましたが、校舎とグラウンドの位置やイメージは、ほとんど30年前と変わりません。

子供が小さいころは、時々小学校で、30年前の自分とだぶらせながら遊んだものです。今後、生活環境が変化する中でも、私と大歳小学校の関係は変わらないと思います。

33. 合奏コンクールへの出場

元大歳小学校教諭 前原浩志

山口県音楽教育連盟から、福岡市で開催される第9回「全九州・山口県小学校音楽コンクール」へ、山口県代表として出場の推薦を受けたのは、昭和39年も終わるころだったと記憶している。

第18回山口国体という大行事を無事終了し、ホッとしていた時の突然の出来事である。大歳小学校の過去の実績を評価されての推薦ということで、職員会でも了承され、引き受けることになった。九州各県では、予選を勝ち抜いての出場と聞いているだけに、正に晴天の霹靂である。

課題曲の送付があったのが、それから間もなくのことだったろうか。ウィリアムテル序曲より「静けさ」だった。すぐに、随意曲の選定にと先輩の坂田淑子先生と相談し、課題曲とは趣を異にした方がよかろうとのことで、規定演奏時間、練習期間、演奏効果等も考慮し、繰り返しの多い曲の中から、アルルの女より「ファランドール」を選曲した。

古い楽器が大半だったので、楽器の購入も大きな課題だった。校長は、昼夜の別なく、地区内の協力を仰いで回ったものである。おかげで、演奏に必要な楽器は、希望どおりそろえてもらうことができた。

子ども達も本気になり、空き時間を見つけては練習に励んだ。課題曲のリコーダーでのトリル運指が難しいと涙ぐんで練習したM君、随意曲のタンバリンの音が切れないと家にまで持ち帰って練習したI君、数少ない出番でシンバルの効果的音色を工夫したN君等、とにかくみんなが本気になって練習した。

秋になって、何とか形もでき、講師の方のご指導もいただき、内容の充実を図った。保護者の方も応援部隊を編成し、コンクールにはぜひ一緒にと、誠に心強い協力を得た。

やがて12月。山口県の準急「あきよし」を保護者の方のお骨折りで大歳駅への臨時停車も実現できた。十数名の保護者による楽器の積み込みが終わり、さあ、いよいよコンクールへの出発である。修学旅行の浮いたような車内風景とちがひ、何か異様な雰囲気であった。

箱崎の幼稚園での簡単な音合わせの後、九大医学部前の肥前屋旅館へ到着。コンクール出場を意識してか、子ども達は本当におとなしい。

そして、いよいよ本番の日、電気ホール（福岡市）でのリハーサル、緊張のうちに本番開始。練習通り、満足のいく演奏である。今でもあのステージの音は耳に残る。

結果は、最優秀に次ぐ優秀校。

最優秀は福岡県穎田町立穎田小学校、随意曲は、ハチャトーリアンの「剣の舞」。中間部の音の柔らかさは抜群。「シテヤラレタ」と審査結果を子ども達と納得した次第である。

帰途、RKB毎日放送に寄り、テレビ録画。テレビがめずらしかった今から30年前、子どもと共に出演できたのは、開校70周年の記念すべき年でもあった。



34. 忘れられない大歳小学校

元大歳小学校教諭 原田富美恵

“さようなら旧校舎”平成6年6月25日午後2時からのお別れ会に出席しました。

「原田さん、大歳小の校舎ができるよ。文部省のモデル校舎、自慢できるすばらしい教室、指導室があるよ。早く転勤しておいでよ」と、今は亡き松岡校長先生のお声を思い出しました。この校舎建築に全力を注がれた松岡校長先生は、竣工を見ないで病に倒れられ、若くして(36歳)亡くされました。

戦後の新しい時代に向かって、前進の第一歩を踏み出されたときで、非常に残念なことでした。読書家の先生の書籍が、松岡文庫になりました。戦時中でも教育書を読まれ、私のような新人教師にもその本を貸してくださいました。後日、私の力になってくれたと思っています。

大歳小学校には、他の学校に無いものが数々ありました。それは、山大附属小学校にも無い程整備された教室、指導室です。驚きでした。毎年山大教育学部の教育実習を受け、その室を使いました。平素は毎日のプリント類を作成しました。空き時間があると印刷ができましたので学級文集作りに取り組み、子どもたちの手づくり文集までできました。その文集は私にとっては宝物です。

私が大歳小学校に着任したのは昭和41年4月で、受け持ちのクラスは約30人ばかりでした。前任校では約60人近いクラスでしたので、びっくりするやら嬉しいやら。附属小学校並みと喜びました。その時の全校児童数は約450人ばかりでした。

大歳小の校区は細長くその中を山口線が通っています。そのため登下校には踏切を通る児童がほとんどでした。ある日、1年生の児童達が下校時に踏切の所で待っていました。何人かが「オーイ、早く来い、来い」と言いながら白いハンカチを振り続けたところ、踏切近くで列車が急停車。車掌さんから注意を受けました。その日、早速小郡公安室の方が来られ交通指導を徹底するよにとのこと。全校児童集会があり、係の先生から踏切の渡り方、待ち方等の指導がありました。校区の中には大きな踏切が5か所。小さい踏切は、数多。市内の他の学校には無いことでしょう。

環境の良い学校なので色々な研究会を引き受け、次々に発表しました。そのために全職員が先進校の研修に出かけ、他校の先生方がうらやましいと言っておられました。

大歳小学校の校歌は、在校生の田中恵子さんの作詞で、作曲は私の小学校の恩師(山口大学教育学部で音楽の指導をされていた)弘中策先生です。校歌を歌うたびに懐かしく思い出します。

テレビも無かったときに各教室に設置されました。教育番組などの研究を推進しました。そのテレビは、地区の方々の熱意で設置されたのです。毎年4月になると教育機器が購入されました。それも児童のためにと、地区の方々が寄付されたのです。

あのモデル校舎ができてから約40年。今年、新しい近代的な校舎になり、児童数も多くなりました。歴史の流れを知っておられるのは学校内におられた「大歳様」でしょうか。

35. よく遊び よく学べ

昭和44年卒 高井 宮成 隆

“よく遊び、よく学べ”私に小学校の頃は遊んだ記憶しかありません。当時は車も家も少なく、山へ行ったり、川で魚を獲ったり、蛇などもよく見かけ、毎日が冒険のようでした。なんと、自宅前の川には蜷もいました。また、授業で樫野川へ泳ぎにも行きました。今ではとても考えられないことです。

JR山口線にはSLがいつも走り、あのもうもうとした煙がせまってくることに、たまたま興味がありました。一步外に出れば季節に合った遊びや場所がたくさんあり、喧嘩もしたし、悪さもしたし、色々な方に叱られることも頻繁でした。

時代の流れは早いもので、環境も人もずいぶん変わってしまいました。今は、賢い子供たちが多くなった反面、その瞬間にしか味わえない感性を失っているようです。よく遊ぶことで心身が鍛えられ、ルールや規範も自然に体得するものだと思います。

6年生のとき、メキシコオリンピックで日本のサッカーが3位になったことに感動して、私の行動も遊びから、1つのスポーツへと変わりました。このことが今に至るまで、体育やスポーツに関わるきっかけとなったのです。

小さい頃の思いや夢、体験は、後に生かされるものだと考えます。自然に触れ、多くの友人と、泥んこになって遊んだ時代があったことを、懐かしく感じます。そして、大歳小で学べたこと、学校の百年の間に自分がいたことを、とても嬉しく思っています。

36. 心の痛みを教えてくれた先生

昭和49年卒 東京都 河野 恵子

最近新聞でいじめの記事を読むたび、思い出す先生がいる。5年生の時だった。その頃クラスで、ある子に対していじめがあった。その子のやることなすこと気に入らず、クラス中でからかって面白がっていた。自殺に追い詰めてしまうような残忍なものではなかったと思うが、その子にとってはたまらない毎日だったろう。

ある日、担任のO先生が、なぜその子を皆でいじめめるのか、学活でクラスに尋ねた。次々に挙がる手、述べられる理由。私たちは調子に乗り大騒ぎをしながら、ひとの気持ちなどおこまいなしに、意見を述べ続けた。そして、潮が引くように、沈黙が訪れた。私たちは、ショックを受けた。ずっと黙って聞いてらしたO先生の頬に、涙が流れているのに気付いたからだ。先生はそして、何も言われず部屋を出ていかれた。部屋にとり残され、どうしたらいいのかわからずに私たちはぼんやりしていた。まさか、皆の言葉が、大好きで尊敬していたO先生を傷つけるなんて思いもしなかったから。それからいじめも減り、その子も日に日に明るさを増していった。

先生は、私たちに叱ったり、諭すようなことは何ひとつ言われなかった。でも、ひとを不用意に傷つけることで経験する“心の痛み”とは何かを気付かせてくれた。小さい時にこのような素晴らしい先生に出逢えて本当に良かったと、今でも折にふれ思うのだ。

37. 木造校舎の思い出

昭和50年卒 松永昌治

先日、大歳小学校の前を通りかかった折、校舎が建て替わっているのに驚いた。覚えのある木造校舎はあとかたもなく、鉄筋コンクリートの近代的な建物が軒を並べていた。

思えば、我々は、昔の木造校舎で学んだ最後の世代に当たっている。掃除の時間に、板張りの廊下を雑巾で拭くなどということは、今の生徒達には想像できないのではないだろうか。“すいばり”が刺さったり、床からとびだした釘でけがをするなどということも日常茶飯事であった。

木造校舎の中でも、一番記憶に残っているのは旧講堂である。その頃体育館はなく、卒業式や音楽会といった行事はもとより、雨天時の体育の授業は全て講堂で行われた。古い建物で天井が低く、床はやはり板張りであったため球技は行えず、講堂での体育はもっぱら体操と決まっていた。マット運動、跳び箱といったものであるが、運動の苦手な私は辛い思いをしたものである。

今の体育館が建っている場所は当時は田で、ちょうど我々の在学中に、用地の造成工事が始まった。工事中は、体育の授業で工事の手伝いをしたのを覚えている。一輪車で土を運び、田を埋めたのであるが、考えてみれば小学生が土を運ぶぐらいで工事の手助けになるわけもなく、あれは勤労学習の一環であったのだろう。

今はない木造校舎にまつわる、懐かしい思い出である。

38. 嬉しくて、悲しくて、恥ずかしくて

昭和50年卒 矢原 小野 秀 樹

小学生の時にしたことは… たくさんあるある。

「怪獣ごっこ」をよくした。ウルトラマン役がしたかった。テニスボールで「ろくむし」を毎日やった。ボールがうまくキャッチできなかったな。よくぶつけられてた気がする。

ソフトボールのキャッチャーでファールチップが顔面直撃したときは痛かった。鼻血が止まらなかった。泣いたな。マラソン大会がいやだったな。体力が無かったから辛かった。

記念切手の収集が流行っていた。昼休みに大歳郵便局へ行って買ったこともあった。

「吉敷の滝」に学年で行ったとき、弁当を食べる前にひっくり返した時はくやしかった。最悪だった。

気は弱くて泣き虫だったが、負けん気だけは強かった。威張っている奴が気に入らなかった。反旗を翻していじめられたこともあったな。

小学5年から「スポーツ少年団」にはいってサッカーを始めた。体が小さくても結構やれたのが嬉しくて、毎日楽しかった。本気で練習した。

思い出といえば、たくさんあるけど、これぐらいにしておこうか。30歳を過ぎても鮮明に心に残るあの瞬間、あの気持ち。嬉しくて、悔しくて、悲しくて、恥ずかしい。あア一瞬の出来事みたいなんだけど。

第6章 百周年記念



創立100周年記念碑

題字は武波貞義さん 施工は中村造園